

ローマン・ブリテンにおける「カタストロフィ」 —ブリガンテス族の女王カルティマンドゥア

小柳康子

はじめに

ローマン・ブリテン時代における「カタストロフィ」とは何かを考える時、最初に思い浮かぶものは、紀元43年の第4代皇帝クラウディウス (Claudius) によるローマのブリテン島侵攻および征服であろう。紀元前55年から54年にかけてのカエサル (Gaius Julius Caesar) による遠征の後およそ1世紀を経て、ブリテン島をローマの属州としたこの侵攻は、自分たちの領土が外国勢力の支配を受けることになったという意味で、ブリトン人側から見れば明白なカタストロフィとみなされうる事件であった。そしてこのブリテン島における史上最初のカタストロフィは、ブリガンテス族 (the Brigantes) のカルティマンドゥア (Cartimandua) とイケニ族 (the Iceni) のボウディッカ (Boudica or Boudicca) という2人のブリトン人部族の女性の名を歴史に刻んだ。彼女たちは自らの世界の安定を脅かし破壊する出来事に、親ローマ、反ローマという対立する形で向き合ったのである。

夫プラスタグス (Prasutagus) の死後、自分と2人の娘に加えられた仕打ちに怒り、周辺のトリノウァンテス族 (the Trinovantes) の支援を受けてローマに反旗を翻すというイギリス古代史における大事件の中心人物となったボウディッカについては、子供向けの書物から本格的な研究書に至るまで多くのテキストが出版されており、非常によく知られている。これに反して、ローマに恭順した北方部族ブリガンテス族の女王カルティマンドゥアについては、名前すらも知られていないのが現実であろう。実際のところ、カルティマンドゥアはこれまで、タキトゥス (Cornelius Tacitus) の『年代記』(Annals) や『同時代史』(The History) に依拠して、いわゆる「悪女」

として短く語られてきただけである。しかし近年まとまった研究書—Nicki Howarth, *Cartimandua: Queen of the Brigantes* (2008)—も出版され、ローマン・ブリテン時代にカルティマンドゥアが果たした役割の見直しもはじまりつつある。そのため本稿では、「カタストロフィとしてのローマによるブリテン侵攻」という枠組みの中で、最初期のブリテン島の歴史を概観しながら、カルティマンドゥアがクラウディウスの侵攻をどのように受け止め生きたのかについて紹介することにする。⁽¹⁾

1. カエサルからカリグラ (Caligula) までのブリテン島

ローマ侵攻以前のブリテン島の歴史について、ローマ人が残した信頼に足る最初の文献資料とされているのは、紀元前1世紀のカエサルによる『ガリア戦記』(*The Gallic War*) である。カエサルは紀元前58年から51年までの8年間、現在のフランス、ベルギー、オランダ南部、ドイツライン川以南、スイスにあたるガリア (Gaul) に遠征し、そこで様々な部族と戦ってこの地を平定した。8巻からなる『ガリア戦記』は、最後の1巻を除いてカエサルが自ら書いたこの戦いと征服の記録である。このガリア征服戦争の途中でカエサルは紀元前55年と54年の2回ブリテン島に渡り、ローマにとって未知なる地域であった北辺の島について、第4巻末尾の20章から38章と第5巻の5章から23章に詳しく記述している。ここには、ブリテン島の地誌、部族単位のまとまりをなして住んでいるブリトン人の生活様式や容貌、彼らとの戦闘の様子が明快な筆致で述べられており、のちにタキトゥスが『アグリコラ』(*Agricola*) の第10章から13章で伝えたブリテン島の描写と共に、現代の私たちがイギリスの歴史を辿る際の必須の情報源となっている。

ところで、危険をはらむ海を越え、ブリテン島遠征を企てたカエサルの意図はどこにあったのだろうか。第1回の遠征について彼は “...even if the season left no time for a campaign, none the less it would be a great advantage to him simply to land on the island and observe the kind of people who lived there, and the localities, harbours, and approaches.” (*The Gallic War*, 4. 20, 79) と書い

ていることから、最初の年は情報収集だけにし、翌年に本格的な戦争を行って恒久的な支配を打ち立てようとしていたと思われる。それでもカエサルは、あらかじめ副官に下見をさせ、遠征計画を知って使節を派遣してきたブリトン人を送り返す際に、アトレバテス族 (the Atrebrates) の王コンミウス (Commius) を同行させ、部族たちにローマへの恭順を促す役割を担わせることを忘れなかった。

第1回の遠征でローマ軍は、それまで見たことのない馬と戦車によるブリトン人の戦術に苦しめられながらも勝利を取め講和を結んだが、その後、嵐に遭遇し、かなりの数の船を失うという不運に見舞われた。そのため彼らは、修理のための部材や食料にも事欠くようになり、早々に撤退を余儀なくされたのである。カエサルはこの経験を踏まえて、第2回遠征には周到な準備を怠らなかった。彼は冬の間多くの船を準備し、不在の間に反乱を起こす恐れのあるハエドゥイ族 (the Aedui) のドゥムノリクス (Dumnorix) を処刑すると、イティウス港 (Itius Portus; 現在のブローニュ) から800隻以上の船を連れて出航した。

上陸後、待ち受けていたブリトン人との戦いを有利に進めていたローマ軍は、またも大嵐に襲われて40隻の船を失い、戦いを中断して、急ぎ船の修理や建造を済まさなければならなかった。そして再び戦場に戻った彼らの前に、自らの領土を占領されまいとする大勢のブリトン人戦士たちが立ち上がったのである。

By the time of his arrival even larger British forces had mustered there. By common agreement they had entrusted the supreme command of their campaign to Cassivellaunus, whose lands were separated from the coastal states by a river called the Thames, which is about seventy-three miles from the sea. Between Cassivellaunus and the other states there had previously been continual warfare, but our arrival frightened the Britons into putting him in charge of the entire war effort. (*The Gallic War*, 5. 12, 95)

ここで言及されているカッシウェッラウヌス（Cassivellaunus）とは、カトゥウェッラウニ族（the Catuvellauni）と呼ばれる部族の族長であった男である。カトゥウェッラウニ族は、ローマに対して敵対心を燃やす反動的な部族として、後々までローマを悩ますことになる。

ブリトン人との戦闘は相当激しいものであったが、戦力にまさるローマ軍は彼らを打ち負かし、カッシウェッラウヌスはカエサルの決めた条件—「人質」(hostages) と「毎年の年貢」(annual tribute) 提供—の遵守を約束して降伏した。これによって、ブリテン島がひとまずローマの敵対勢力となることを阻止したカエサルは、部族同志の争いでブリテン島が不穏な状況に陥ることのないよう、カッシウェッラウヌスにマンドゥブラキウス（Mandubracius）率いるトリノウァンテス族を虐待しないようにきつくいましめ、ローマへ戻ったのである。

『ガリア戦記』に記録されている紀元前55年と54年のカエサルによるブリテン島遠征は、どちらもブリトン人にかなりの犠牲を払わせた出来事ではあったが、カタストロフィと定義できるほどのものではなかったといえるだろう。なぜならカエサルの出した条件には、ブリテン島を自らの支配下に置こうとする征服者の意図が含まれてはいたが、総督を派遣し、砦を作り、軍団を駐屯させて、ブリテン島を属州とすることはなかったからである。両者に互いの現実を理解させる契機となったカエサルの遠征後、交易も盛んになり、ブリテン島には、金属細工、ガラス器、陶器、ワインなどの輸入も増えていった。また支配階級の子弟がローマに留学して都市文化と接触することもまれではなくなり、ブリテン島の閉じられた社会が広がったともいえる。

カトゥウェッラウニ族は当初取り決めを守っていたが、紀元前44年にカエサルが暗殺されると、ローマに抑えつけられていた不満が頭をもたげ、約束を無視して反動的な態度を取り始めた。このため、初代皇帝アウグストゥス（Augustus）は、ローマと友好関係にあったトリノウァンテス族とアトレパテス族との繋がりを一層強化し、不穏な動きをみせるカトゥウェッラウニ族を抑え込もうとした。アウグストゥスは在位中3度にわた

りブリテン島への侵攻を考えることもあったが、国内外の難問解決に忙殺されて実現しなかったという。

アウグストゥスの次の皇帝ティベリウス（Tiberius）が紀元14年から37まで帝位にあった時代は、ローマによるブリテン島征服の動きはみられなかった。現状以上の領土拡大を求めるなどというアウグストゥスの遺訓を守ったというよりは、属州の異民族や外地の前線に配置されていたローマ軍内部の反乱鎮圧に追われていたティベリウスにとって、カトウウェッラウニ族の示す反ローマの姿勢は、帝国を脅かすほどのものではないと思われたからかも知れない。また、カトウウェッラウニ族の両隣には、ローマに友好的な部族がいたことも理由の一つであった。

しかしこの間にブリテン島では、部族間の権力闘争が新しい局面を迎えていた。カトウウェッラウニ族にクノベリヌス（Cunobelinus）という強力な指導者が現れ、ブリテン島南東部を支配下に治めるようになったのである。クノベリヌスの出自は明らかではないとも、タスキオヴァヌス（Tasciovanus）の息子であるとも考えられているが、彼は紀元10年頃から40年頃にかけて権威を振った指導者であり、自らの部族内で権力を掌握すると、周辺のトリノウァンテス族やアトレバテス族を圧迫して領土を拡張していった。ちなみに、シェイクスピア（Shakespeare）の『シンベリン』（*Cymbeline*）のシンベリン王はクノベリヌスがモデルとされている。

老獪な政治家であったクノベリヌスは部族たちともローマとも等距離を置いてこの地域の安定を保ったが、紀元37年にカリグラ（Gaius Caligula）が第3代皇帝の座に就いて間もなく、この情勢が流動化していく。晩年を迎えたクノベリヌスの力が衰えてゆくと共に、彼に抑えられていたアトレバテス族の離反の動きが顕著になり、さらに3人の息子たち、トゴドゥムヌス（Togodumnus）、カラタクス（Caratacus）、アドミニウス（Adminius）の間で領土をめぐる争いが起きたのである。トゴドゥムヌスとカラタクスは反ローマ、アドミニウスが親ローマであった。そしてアドミニウスがブリテン島から追放されて、カリグラのもとに現れ、ブリテン侵攻を求めるという事態が発生する。カリグラはブリテン島の不穏な政治情勢を伝える

アドミニウスとの面会に触発されてブリテン島侵攻を思いつき、紀元40年、イティウスの海岸に大軍を集結させた。しかし彼は、軍服を着て整列した兵士たちに貝殻を集めるように命令を発しただけで、ブリテン島には出発しなかった。このエピソードをスエトニウス(Suetonius)は『ローマ皇帝伝』(*The Twelve Caesars*)の中で次のように書いている。

In the end, he drew up his army in battle array on the shore of the Ocean and moved the siege engines into position as though he intended to bring the campaign to a close. No one had the least notion what was in his mind, when suddenly he gave the order “Gather seashells!” He referred to the shells as ‘plunder from the sea, due to the Capitol and to the Palatine’, and made the troops fill their helmets and the folds of their clothes with them; he commemorated this victory by the erection of a tall lighthouse. (*The Twelve Caesars*, 46, 170)

このカリグラの奇矯な振る舞いの理由は、狂気の現れであるとも、海という自然の制圧であるとも解釈されているが、ともあれ、カリグラによる侵攻はひとまず回避された。しかしブリトン人たちは、ローマによる再侵攻、すなわち彼らにとってのカタストロフィが近いと予感したことは確かだと思われる。

2. カタストロフィとしてのブリテン島侵攻

カリグラの暗殺後の紀元41年、50歳のクラウディウスが第4代皇帝の座に就いた。そして軍事的経験皆無であったこのクラウディウスにより、それまで計画されても実行されなかったブリテン島の属州化を目指す侵攻が実現する。カエサルの事業を受け継ぎ完成させ、ローマ皇帝としての権威を高めたいというクラウディウスの個人的野望は、クノベリヌスなき後の

ブリテン島南東部における政治的混乱への対処と、秩序破壊者としてガリア全域から追放したドゥルイド教司祭者たちへの危惧が結びついていた。

カエサルの遠征以来、ブリテン島の南東部にはアトレバテス族やトリノウァンテス族などの親ローマ部族がおり、ローマは彼らの力で、カトゥウェッラウニ族という全面的にはローマに服従しているとは思われない部族を抑制させていた。ローマは彼らとの友好関係を強固にすることにより、反ローマの勢力拡大を抑えてきていたのである。クノベリヌスが支配者として君臨していた間はこのバランスが保たれていたが、彼が衰え死を迎える頃から、クノベリヌスの息子カラタクスを中心にして、反ローマの動きが大きくなっていった。カッシウス・ディオ（Cassius Dio）は『ローマ史』（*Roman History*）において、これを解決するには武力侵攻によるしかないと考え始めていたクラウディウスのもとに、ベリコス（Bericus）というブリトン人が現れ、軍隊を送ってくれるよう嘆願したと伝えている。アトレバテス族のウヰリカ（Verica）と同一視されているベリコスの来ローマは、ブリテン島南東部におけるローマとどう向き合うかという問題をめぐっての権力闘争の激しさを物語っている。そしてベリコスの嘆願は確かに、ブリトン人にとってのカタストロフィの引き金となったのである。

カエサルのように自ら先頭に立って軍を率いることはしなかったクラウディウスは、司令官にドナウ川流域の属州パンノニア（Pannonia）の総督アウルス・プラウティウス（Aulus Plautius）を送り込んだ。経験豊富なプラウティウスの下に、第2アウグスタ（II Augusta）、第9ヒスパナ（IX Hispana）、第14ゲミナ（XIV Gemina）、第20の4個の正規軍団に加えて多くの補助軍団が集められ、船団を除いて総勢約4万の精鋭軍が上陸に参加した。このように多くの軍団とそれを指揮するベテランの総司令官を用意しているところからも、クラウディウスのこの侵攻を成功させようという意気込みのほどが知られる。

タキトゥスは『年代記』において、ティベリウス、カリグラ、クラウディウス、ネロの4代の皇帝とその時代について書いたが、残念なことに全体の3分の1は欠落しているため、43年の侵攻前後の様子を知ることができる

のは、カッシウス・ディオの『ローマ史』を通してである。

『ローマ史』には地名がでていないが、ローマ軍の上陸地点はリッチバラ (Richborough)、最初の戦場はメドウェイ河畔 (River Medway) とされている。プラウティウスは、森に隠れ川や湿地帯にローマ軍を追い込んで戦いを進めるブリトン人にとまどうこともあったが、最初の2日続いた戦いで、橋のない川を兵士たちに軍服のまま泳ぎ渡らせて不意を突き、先回りしてブリトン人の戦いに必要な馬を殺すなどの巧みな戦術を駆使して彼らを混乱に陥れた。しかし彼らは敗走しながらテムズ川にローマ軍をおびきよせ、流域での戦闘が続く。これは初戦と同じく、ローマ人には不利な場所での戦闘であったが、多くのブリトン人を殺戮することができた。しかしプラウティウスはそこから先に軍を進めることはせず前進を中止し、このテムズ川でクラウディウスが来島するのを待つことにした。クラウディウスに勝利の花を持たせるためであった。この時、ブリトン人たちを束ねて戦いの先頭に立ったクノベリヌスの2人の息子のうち、トゴドゥムヌスは戦死したが、弟のカラタクスは逃亡し、51年に捕えられるまで、ウェールズを拠点にしてローマに反抗し続けることになる。

プラウティウスの連絡を受けて6週間後、クラウディウスはローマ皇帝として初めてブリテン島にやってきた。そして彼はテムズ河畔で軍隊の指揮を引き継ぎ、ブリトン人たちと戦い勝利したとされている。この後一行はブリトン人の主要都市カムロドゥノウム (Camulodunum; 現在のコルチェスター) に入り、そこでブリトン人たちを最終的に平定した。この時11人の部族長がローマに従うことを誓った。ブリテン島全域ではなくても、少なくとも南東部はローマの支配下にはいったのである。クラウディウスのカムロドゥノウムへの行進からその地での部族長の服従は、ローマにおける勝利の凱旋式がブリテン島でも繰り返されたものと考えていいであろう。これはつまり、ブリトン人にとってのカタストロフィは、このクラウディウスのカムロドゥノウム凱旋に象徴されているということである。クラウディウスはブリテン島には16日滞在しただけで、後事をプラウティウスに託して帰国した。ディオはクラウディウスの出発からブリテン島上陸

の一連の出来事を以下のように述べている。

He sailed down the river to Ostia, and from there followed the coast to Massilia; thence advancing partly by land and partly along the rivers, he came to the ocean and crossed over to Britain, where he joined the legions that were waiting for him near the Thames. Taking over the command of these, he crossed the stream, and engaging the barbarians, who had gathered at his approach, he defeated them in battle and captured Camulodunum, the capital of Cynobellinus. Thereupon he won over numerous tribes, in some cases by capitulation, in others by force, ... (*Roman History*, LX, 421)

3. カルティマンドゥア・カラタクス・ウェヌティウス (Venutius)

アウルス・プラウティウスはブリテン島での4年間に南東部の征服活動を成功させて47年にローマに戻った。彼の後を継いで第2代総督となったのはプブリウス・オストリウス・スカブラ (Publius Ostorius Scapula) である。オストリウスの重要な任務は、プラウティウスがやり残した南西部地域の制圧にあった。ウェールズ一帯に住む、デケアングリ族 (the Deceangli)、オルドウィケス族 (the Ordovices)、シルレス族 (the Silures) などの部族が、43年にテムズ川での戦闘から逃走したカラタクスを指導者として、ローマに激しい抵抗を続けていたからである。そしてカラタクスは紀元51年、反ローマの部族たちを糾合してローマに最終決戦を挑んだ。彼が自由か隷属かと叫び、カエサルを追い返した先祖たちを思い起こせと部族たちを鼓舞する有様をタキトゥスは次のように描写している。

Moreover, the tribal chieftains were doing the rounds of their men, giving encouragement and building confidence by easing fears,

kindling hopes, and providing other incentives to battle. As for Caratacus, he was darting this way and that, proclaiming that this was the day and this the battle that would begin their recovery of liberty or else their eternal slavery. He also called out the names of their ancestors, who had driven back the dictator Caesar, and thanks to whose courage they had been spared the axes and tribute-payments, and had kept the persons of their wives and children free from violation. (*The Annals*, 12. 34, 250-251)

しかし、カラタクスのこの呼びかけに呼応して始まった激しい戦いを制したのはローマ軍であった。カラタクスの妻と娘は囚人となり、兄弟たちは降伏した。カラタクス自身は、43年の戦闘の時と同じように、戦死を免れてブリガンテス族の領土であるブリガンティア（Brigantia）に逃げ込み、カルティマンドゥアに保護を求めたが、彼女はカラタクスを匿うのではなく捕えてローマに引き渡してしまう。カルティマンドゥアの史書における最初の言及である。タキトゥスは、ローマに刃向ったカラタクスを引き渡したカルティマンドゥアを、自由の戦士を敵に引き渡した非難されるべき女性であるかのように書いている。

Caratacus himself sought the protection of Cartimandua, queen of the Brigantes, but (as insecurity generally attends adversity) he was put in chains and handed over to the victors, eight years after the commencement of hostilities in Britain. His fame had thus passed beyond the island and spread through the nearby provinces, becoming known throughout Italy, as well. (*The Annals*, 12. 36, 251)

クラウディウスは長い間ローマを苦しめたカラタクスを捕えたことで自分の面目を施そうと、カラタクスをローマに連行し、彼を妻、娘、兄弟、

家来たちと共に市民たちの前で行進させる。彼らは助命を求めたが、カラタクスだけは胸を張り次のような演説をした。この演説を聞いたクラウディウスは感銘を受け、カラタクス本人と妻や兄弟たちの鎖を解き自由にしたのである。カラタクスはその後ローマで暮らしたのではないかとされている。

‘Had I, in my successes, observed a moderation that was as great as my nobility and rank, I would have come into this city as a friend rather than as a prisoner of war. Nor would you have objected to accepting into a peace-treaty a man descended from famous fore-fathers, and one ruling over many nations. My present lot, degrading to me, is glorious for you. I had horses and men, arms and wealth. Is it surprising if I was loath to lose them? For if you want to be masters of the world, does it follow that the world should welcome slavery? If I were being brought here after an immediate surrender, there would have been no fame attaching either to my misfortune or your great success. And forgetfulness will follow my execution, whereas if you keep me alive I shall be an everlasting illustration of your clemency.’ (*The Annals*, 12. 37, 252)

カラタクスが捕まっても、ウェールズでの反抗は止まず、征服作戦は続投されたが、その最中、52年にオストリウスが急死する。後を継いだのはアウルス・ディディウス・ガルス（Aulus Didius Gallus）である。57年まで属州総督を務めたガルスもまた、ウェールズの部族を帰順させようと骨を折ったが、これと時を同じくして、ブリガンテス族の間でも、親ローマと反ローマの間の葛藤が激しくなっていった。この部族内対立は、カルティマンドゥアがローマ侵攻の初めから親ローマ政策をとり友好関係を結んだことを快く思わない勢力がブリガンテス族の間に存在していたためだけでなく、彼女と夫ウェヌティウスの間が険悪になり、カルティマンドゥアが

ウェヌティウスを追放して彼の楯持ちのヴェロカトゥス（Vellocatus）と再婚したことに起因していた。男女の葛藤が部族の間に、反ローマと親ローマという対立を深め、ブリガンテス族の間の亀裂が一層大きくなっていったのである。

As a result of these differences and the frequent rumours of civil war the Britons were induced to pluck up courage by Venutius, who, in addition to his fierce temperament and hatred for all things Roman, was fired with personal animosity towards Queen Cartimandua. She ruled over the Brigantes, exercising great influence by virtue of her noble birth, and had increased her standing when, with her treacherous seizure of King Caratacus, she appeared to have paved the way for Claudius' triumph. From this act came wealth and the self-indulgence of success. She rejected her husband Venutius and took his armour-bearer Vellocatus as her husband and consort. The royal house was straightaway scandalized by this shameful event: the people sided with the husband, the adulterer was bolstered by the lust and savagery of the queen. (*Histories*, 3. 45; *Sourcebook*, 75)

ウェヌティウスはカルティマンドゥアと別れた後、カラタクスに代わってブリトン人の反ローマ闘争の指導者になり、58年と69年の2度にわたってカルティマンドゥアの領土に攻め入った。ローマはこの部族闘争に軍隊を派遣して介入したが、カルティマンドゥアは69年にはついに敗れ去り女王の座を追われた。

Venutius, therefore, summoned help (from outside) and with a simultaneous revolt on the part of the Brigantes themselves forced Cartimandua into a very tight corner. She in turn appealed to the

Romans for help, and after a number of indecisive engagements our cohorts and cavalry squadrons managed to extricate the queen from her dangerous situation. Venutius was left with the kingdom, we the war. (*Histories*, 3. 45; *Sourcebook*, 75)

彼女はローマ軍にすんでのところまで救い出されたが、その後の運命は定かではない。カルティマンドゥアに代わりブリガンテス族の王位に就いたウェヌティウスは、71年に第8代属州総督ペティッリウス・ケリアリス (Petillius Cerialis) によって敗れ去った。

4. カルティマンドゥアとカタストロフィ

タキトゥスの『同時代史』と『年代記』におけるカルティマンドゥアの記述は次のように整理できるだろう。カルティマンドゥアは、1) 高貴な家柄に生まれてブリガンテス族の女王として君臨し、2) 紀元51年、ローマに反抗して敗れ自分の領土に助けを求めてきたカラタクスを見捨ててローマに引き渡し、3) 50年代半ば頃、ウェヌティウスと離婚後、彼の楯持ちであったウエロカトゥスと結婚し、4) 離婚後間もなくと69年の2度、ブリガントニアに攻めてきたウェヌティウスと戦い、5) 最初は勝利したが、ついには敗れて権力の座から追われた。

ここからわかるように彼女は、カラタクス、ウェヌティウスとは異なり、自分の領土があるブリテン島にローマが征服目的でやってきても、抵抗することはなかった。カルティマンドゥアがウェヌティウスに2度にわたって攻め込まれ、ブリテン総督に援助を求めた時、彼らがすぐさま軍隊を送ってきたことに明らかなように、ローマがカルティマンドゥアを助け、カルティマンドゥアもローマに友好的姿勢を取り続けたのは、カルティマンドゥアがローマと特別な友好関係を持っていたからである。これは、ブリガントニアがローマにとって被護王国 (client kingdom) であり、カルティマンドゥアは被護支配者 (client ruler) であったということに他ならない。

ローマの領土拡張政策の眼目は、自国の独特の人間関係を征服した異民族との間にも援用し、互いに不利にならない、「慎重に選ばれた現地の支配者との被護関係」(the client relationship with a carefully selected local ruler)⁽²⁾を結ぶことにあった。被護王国の首長は自らの権威を保ったままローマに恭順し、ローマ市民権を与えられたという。南東部を最初に征服した後、激しく抵抗する西部ウェールズの山岳地帯の制圧に向かったローマにとって、背後に友好関係にあるブリガンテス族が控えていることは重要であった。カルティマンドゥアはブリガンテス族の中にローマとの友好関係を結ぶことに反対する勢力がいたにも関わらず、被護国家となったのである。

すでに見てきたように、カルティマンドゥアがカラタクスをローマに引き渡した女性として、タキトゥスのテキストに最初に登場する年は紀元51年である。このため、彼女がクラウディウスの侵攻時の43年に女王であったかどうかは不明であるが、ホワースをはじめとする研究者たちは、カルティマンドゥアはこの時にはすでに支配者であったと推測している。⁽³⁾ また、アウルス・プラウティウスがブリガンティアまで軍を進めたという記録は残されていないため、クラウディウスがカムロドゥノウムに入った時、恭順を誓った11人の部族長の1人がカルティマンドゥアではなかったかとも考えられている。どのような形でローマとの被護王国関係の取り決めがなされたかはともかく、クラウディウスの侵攻というブリトン人にとってのカタストロフィに直面して、カルティマンドゥアは、部族内の親ローマ政策への根強い反対にも関わらず、ローマと友好関係を結んだのである。

カルティマンドゥアのこの親ローマ政策は、故国を侵略する帝国を受け入れるという意味で、現代においては植民地主義の手先であり、国家に対する裏切りという汚名を着せられる態度に他ならないであろう。しかしローマン・ブリテン時代について考察する時、このような一面的判断は差し控える必要があるかも知れない。部族単位のコミュニティに分かれた状態で統一国家のまだないブリテン島の人間が、高度に発達した文明を持ち、広い属州を支配しているローマ帝国に刃向うことがどのような結果を招くことになるかを、ブリガンテス族の高貴な家柄に生まれたカルティマ

ンドゥアは理解できていたであろう。ローマに徹底抗戦して部族民を殺戮される危険にさらすことと、恭順の意を示して自分たちの安全を守ることを秤にかけた時、彼女の選択は容易だったに違いない。カルティマンドゥアがローマ侵攻以来30年近くの間ブリガンテス族を統治できたのは、このように得失を冷静に判断するという政治的姿勢を持ち合わせていたからだと思われる。

タキトゥスは、カルティマンドゥアが69年に前夫ウェヌティウスに攻め込まれて王位を失った後の運命について書いていないため、彼女のその後の人生については推測する他ない。最も考えられるストーリーは、イタリアの安全な場所で余生を送ったというものだが、これについてはホワースの興味ある引用にとどめたい。

..., there was only one place to go. Cartimandua may have visited Rome before, but Vellocatus would have had family and connections there, and she may even have received a warm welcome—whether she stayed there is another matter entirely.... The tribal queen is likely to have spent her remaining days settled comfortably in a privileged life in Italy somewhere...she was not the first exiled British royal to do so, as both Adminius and Verica could well have remained there....⁽⁴⁾

おわりに

ブリガンテス族のカルティマンドゥアは、ブリテン島侵攻というカタストロフィに直面した時、侵略者に徹底抗戦するのではなく、友好関係を結ぶことを決断した。それが自分たちに有利に働くと考えたからである。失うものと得るものを秤にかけ、最善の策を選択したのである。彼女はまた、ローマを快く思わない夫と離婚して別の男と再婚したことからもわかるように、個人生活においても親ローマの姿勢を一貫して保ち続けた。

カルティマンドゥアは、彼女と正反対の選択をしたボウデッカと比較して、ローマン・ブリテン研究において正当に評価されてきているとは言い難い。彼女はローマによるブリテン島侵攻の歴史の中で言及されることはあっても、本格的な研究対象となつてこなかったのである。しかしこの状況は、ローマン・ブリテンと現代史を大胆に比較し、『グラディエーター』(*Gladiator*) や『ブレイブハート』(*Braveheart*) などの映画の主人公の引用を用いて、ブリトン人の女王を生き生きと描きだしたニッキー・ホワースの『カルティマンドゥア』の出版が示すように、変わりつつあるといえるだろう。ホワースの書により、遙か昔のローマン・ブリテン時代に生きた女性が、想像力の翼に乗って私たちの前に立ち現れたのである。

本稿ではクラウディウスによるブリテン侵攻というカタルストロフィをカルティマンドゥアと異なる形で受け止めたボウデッカの考察はできなかったが、ローマン・ブリテン時代を強い意志を持ち生きたカルティマンドゥアの研究が、ボウデッカ研究と合わせてこの先さらに発展していくことを望みたい。

注

- (1) 1章、2章、3章のローマン・ブリテンの歴史を概観するにあたって参考にした研究書の歴史記述は、古代の一次資料に依拠しており、内容の重複が多い。そのため本稿では煩雑になるのを避けるため、注を省略し参考文献としてまとめた。また、タキトゥス、スエトニウス、カッシウス・ディオの本文中における引用は、括弧の中に章、節、使用した英語訳テキストのページ数の順に記した。
- (2) Graham Webster, *The Roman Invasion of Britain*. (London and New York: Routledge, 1993), 111.
- (3) Brian Hartley and Leon Fitts, *The Brigantes*. (Gloucester: Alan Sutton, 1988), 2; Nicki Howarth, *Cartimandua: Queen of the Brigantes*. (Brimcombe Port Stroud: The History Press, 2008), 49.
- (4) Howarth, 133-34.

参考文献

- Branigan, Keith. *The Catuvellauni*. Gloucester: Alan Sutton, 1987.
- , ed. *Rome and the Brigantes: The Impact of Rome on Northern England*. Sheffield: U of Sheffield, 1980.
- Braund, David. *Ruling Roman Britain: Kings, Queens, Governors and Emperors from Julius Caesar to Agricola*. London and New York: Routledge, 1996.
- Caesar, Julius. *The Gallic War*. Trans. Carolyn Hammond. Oxford: Oxford UP, 2008.
- Dio, Cassius. *Roman History, Books 56-60*. Trans. Earnest Cary. Cambridge: Harvard UP, 1924.
- Dunnett, Rosalind. *The Trinovantes*. Gloucester: Alan Sutton, 1975.
- Hartley, Brian and Fitts, Leon. *The Brigantes*. Gloucester: Alan Sutton, 1988.
- Howarth, Nicki. *Cartimandua: Queen of the Brigantes*. Brimscombe Port Stroud: The History Press, 2008.
- Ireland, Stanley, ed. *Roman Britain: A Sourcebook*. London and New York: Routledge, 2008.
- Suetonius, Gaius Tranquillus. *The Twelve Caesars*. Trans. Robert Graves. London: Penguin, 2007.
- Tacitus, Gaius Cornelius. *The Annals*. Trans. J. C. Yardley. Oxford: Oxford UP, 2008.
- . *Agricola and Germania*. Trans. Harold Mattingly. London: Penguin Books, 2009.
- Webster, Graham. *The Roman Invasion of Britain*. London and New York: Routledge, 1993.
- . *Rome Against Caratacus: The Roman Campaigns in Britain AD 48-58*. London and New York: Routledge, 2003.
- . *Boudica: The British Revolt Against Rome AD 60*. London and New York: Routledge, 2006.
- 塩野七生『ローマ人の物語 14 15 16 パクス・ロマーナ 上・中・下』東京、筑摩書房、2012。
- 『ローマ人の物語 17 18 19 20 悪名高き皇帝たち 一・二・三・四』東京、筑摩書房、2012。
- スエトニウス『ローマ皇帝伝 上』國原吉之助訳、東京、岩波書店、1989。
- タキトゥス『ゲルマニア アグリコラ』國原吉之助訳、東京、筑摩書房、1996。
- 『年代記 ティベリウス帝からネロ帝へ 上・下』國原吉之助訳、東京、岩波書店、2011。
- 『同時代史』國原吉之助訳、東京、筑摩書房、2012。
- 南川高志『海のかなたのローマ帝国: 古代ローマとブリテン島』、東京、岩波書店、2004。

ピーター・サルウェイ編『ブリテン諸島の歴史 1 ローマ帝国時代のブリテン島』
南川高志監訳、東京、慶應義塾大学出版会、2011。